

文化財学習会

ふるさと探訪

テーマ 安徳天皇ゆかりの地
六萬寺周辺を訪ねる

講師 小川 太一郎
(高松市文化財保護協会副会長)

平成24年9月30日(日)

共催 高松市歴史民俗協会
高松市教育委員会

1 開法寺

〔宗派〕 高野山真言宗

〔本尊〕 地藏菩薩

〔由緒〕 開法寺は往古より八栗寺の末寺にて初めは開法寺山（田井の岡の山）にありましたが、永祿から天正年間に兵火に遭い、焼失退転しました。

宝暦九年（一七五九年）三月、本寺八栗寺の願い出によつて得源上人（宮下・入谷氏）が日本六〇余州を回り歛化して財を集め、再興して建てた場所が中山田の西側（正山、庄山）です。それが腐朽したので、最勝寺（旧八幡宮寺）が安政六年（一八五九年）、現在の白羽神社社務所の位置に転じたのでそこへ合併しました。その後また荒廃して、明治十九年（一八八六年）、大町役戸の延命山に講中の懇請を受けて合併し、明治四十三年三月、現在地に建立移転しました。

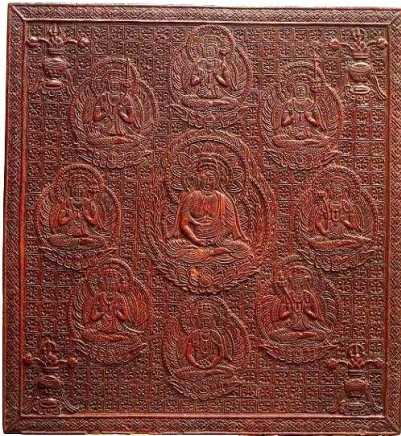


開法寺

※ 板彫阿弥陀曼荼羅（国指定重要文化財）

縦十三・六センチメートル、横十二・六センチメートル、厚さ五・五ミリメートルの長方形板です。大きく宝冠を頂いた阿弥陀如来坐像を中心に、周囲八方に諸菩薩を配し、四隅には宝瓶形を彫っています。技法の特徴等から中国の唐代の作とされています。裏面には中央の上下に把手とってを取り去った跡があり、朱漆で中央に弥陀、その周囲に上から右回りに虚空・文殊・金剛手・普賢・除蓋・弥勒・観音・地藏の名が記され、さらに中央やや右寄りに「応和三年（九六三年）歳次癸亥五月廿六日」の字が刻まれています。この朱漆の字は平安末期頃の書体を示していますが、応和の刻銘は後年何らかのよるところがあつて刻み付けたものでしょう。

この曼荼羅は、廃寺となつた最勝寺から八栗寺に移り、後に開法寺の所蔵となつたと伝えられています。



板彫阿弥陀曼荼羅

2 六萬寺

〔宗派〕 真言宗善通寺派

〔由緒〕 聖武天皇の天平年間（七二九年～七四九年）、日本全国に疫病が流行し多くの死者が出ました。天皇は行基に命じてこの地に一寺を建立し除疫祈願したところ、疫病は終息し、穀物が大いに実ったので、「国豊寺」と呼びました。

その後宝龜三年（七七二年）にまた疫病が流行したので、先例によって同寺で除疫を祈ったところ、疫病は治まりました。そこで六万体の薬師如来像を安置したことから「六萬寺」と改称しました。

寿永二年（一一八三年）義仲軍に敗れた平家は、幼帝安徳天皇を奉じて安徳天皇太宰府から屋島に陣を敷いたが、内裏がまだ完成していないので、まず六萬寺を行在所としました。これが平家の仮御所と言われる所以であり、安徳天皇と建礼門院が京の都をしのび暮らした場所でした。源氏の追討が迫る中、公家たちが詠んだ歌が残されています。



六萬寺

嬉しくも 遠山寺に 尋ね来て 後のうき世を もらしつる哉^{かな}

三位中将 中納言 平 重衡

いざさらば 此の山寺に 墨染の 衣の色を 深く染なむ

経寿房 祐円

世の中は 昔語りに なりぬれど 紅葉の色は 見し世なりけり

但馬守 平 経政

寿永四年、屋島の戦いで忠死した佐藤継信の遺体を義

経が六萬寺の住僧に依頼して瓜生ヶ丘に葬り武具を寄進

し、弁慶、伊勢三郎義盛などの源氏の将はそれぞれ形見

の書状を残しました。

また義経は、軍勝利の願書を弁慶に書かせて、この地

の鎮守である勝軍地藏・愛宕大権現に戦勝祈願をしたと

伝わっています。

天正十一年（一五八三年）四月、長曾我部元親が八栗

城を攻めた時、六萬寺に宿陣しました。寺の由来や平氏、



愛宕大権現

源氏の残し置いた品々を一見してたいへん感動し「天正十一年四月土佐国主、長曾我部元親当国に出陣し此の寺を一軒しおわりぬ」と書いて、将士の者に厳重に寺を大切にしよう言い聞かせて翌日出発しました。

ところが、家来の桑名太郎左衛門という者の失火により、伽藍のほとんどは焼け失せてしまいました。怒った元親は責任者の兵卒二名を打ち首にして牟礼町大町の鑑田というところで四本竹にかけてさらし首にしました。今なお同所には両人の墓が残っています。

※ 安徳天皇

安徳天皇（治承二年（一一七八年）～文治元年（一一八五年））は、第八十一代の天皇です。

ときひと

言仁親王は、高倉天皇と平徳子（建礼門院）の間に産まれました。高倉天皇は後白河天皇と平滋子（建春門院）の子供で、この平滋子というのは平清盛の妻・平時子（二位尼）の妹ですが、

天皇の女御になった妹に対して、遠い分家の清盛の妻になった姉ということで、両者は必ずしも仲は良好ではなく、高倉天皇に対しては平清盛もあまり影響力を行使できませんでした。

そこで、自分の娘である徳子が産んだ子である言仁親王に清盛は大きな期待を寄せ、翌月には皇太子に立てられ、治承四年（一一八〇年）、今の数え方でいえばわずか一歳三ヶ月での即位が決まりました。

当時、院政を敷いた後白河法皇率いる朝廷と清盛率いる平氏は対立状態となり、治承三年に清盛が政変を起こして法皇を幽閉していました。そんな中での即位となり、高倉帝が上皇として院政を敷き、実権を握った清盛が福原に遷都しました。

しかし、東国で挙兵した源氏勢力が優勢となり、源義仲（木曾義仲）が上洛を目指し、平氏は安德帝と三種の神器を携えて都落ちしました。安德帝とともに平氏軍は瀬戸内海を彷徨い、壇ノ浦へ追い詰められました。

源義経率いる源氏軍に劣勢となり、平氏軍は最後を迎えていました。最期を覚悟した清盛の妻・二位尼は安德帝と神器を抱き上げました。私をどこへ連れて行くのかと安德帝が聞くと、二位尼はこれから極楽浄土へ行くと答え、「波の下にも都があります」と慰めると、二人は海中へ身を投じました。

数え年八歳という歴代最年少の天皇として崩御しました。

3 白羽神社

〔祭神〕 正中 応神天皇、左 仲哀天皇、右 神功皇后

〔由緒〕 勧請年月不詳、昔は楠ノ窪神社と称していました。文明年中（一四六九年～一四八七年）、中村加賀守氏宗という者が居り、源氏の子孫でこの郷の主でした。

あるとき、氏宗が生死をさまようほどの大病にかかりました。氏宗が楠ノ窪神社に祈願したところ、夢に、八幡大神と名乗る老人が枕元に現れ、「病気を治したいのなら法華經を書き写しなさい」と告げました。目が覚めて僧徒百人を招き写經を行うと、病はすぐに治りました。氏宗は奉賽のため神殿を造営しようと決心すると、その夜、白羽の矢が東から飛んで来て城北の林中に落ちた夢を見ました。氏宗は、これも神がつかわした御神示であると思い、その地を探してみると白羽の矢が落ちていました。ここに社殿を造営して楠ノ窪神社を奉還し、拝殿、下拝殿、衛門を建立して白羽八幡宮と称しました。

その後、長曾我部の兵火にかかり社殿は全て焼失しましたが、明暦二年（一六五六年）再興して、明治三年（一八七〇年）郷社に列して白羽神社と号し、同四十年九月二十一日、幣帛供進神社の指定を受けました。南側には、中村氏宗とその子、宗卜の五輪の墓があります。

4 栗山記念館

明治三十九年（一九〇六年）十二月、栗山の死後百年祭の際に、栗山顕彰会の事業として栗山



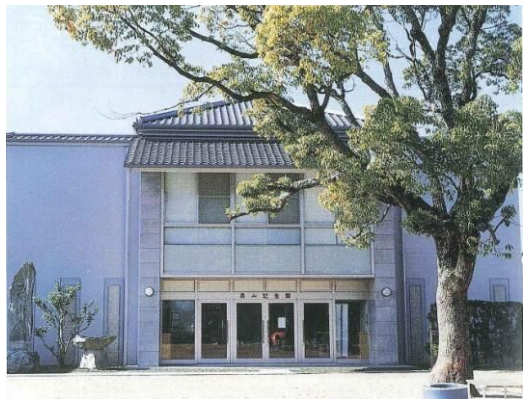
白羽神社

の生誕地である牟礼町宗時の地に清浄な一字を建立、ここに尊像を奉安して子弟後進の薫化に役立てようとなりました。これが栗山堂の起りであり、その地に宅址碑も建立されました。

最初は栗山堂の尊像のお守役として牟礼小学校校長が居住していましたが、十三代校長を最後に現在はお守役はなく、その後栗山堂は同じ敷地内で二回改築されました。最初の栗山堂は記念館として保存され、毎年の栗山祭の時、奉賛茶会の会場として使われていました。現在はその場所に栗山記念館が建てられ、栗山関係の遺品、書簡など多くの資料が展示され、一般に公開しています。平成十八年十二月一日には、盛大に二百年祭が催され、「進学三喩」を刻んだ石碑が記念館の玄関脇に建てられました。

※ 柴野栗山

柴野栗山（一七三六年～一八〇七年）は江戸時代後期の儒学者で、名は邦彦、字は彦輔、通称しょうへいこう彦助、栗山はその号です。寛政三博士の一人で、昌平黌を復興させた中心人物であり、純粹の朱



栗山記念館
(牟礼町史より)

子学者として知られています。

栗山は幼い頃より大志を抱き、十三歳のとき高松藩儒・後藤芝山に入門し、牟礼から高松まで約十キロメートルの道を毎日歩いて通学したと言われています。

十八歳で江戸において昌平黌しやうへいこうの林信充、後に京都で国学を高

橋宗直となん（図南）に学び、明和四年（一七六七年）に阿波藩蜂須賀

候に招かれ、藩儒となりました。その後、天明八年（一七八八年）

には幕府の老中首座・松平定信に強く請われて征夷府待問儒員せいゐふたいもんじゆいんとなり、月六回、十一代將軍家斉いえなりの侍講となりました。

さらに松平定信と共に「寛政の改革」を実施し、定信の施策に栗山ありとまで言われました。学者でありながら、当時の藩政に深く関わりました。その後、岡田寒泉らとともに聖堂の制を改める等、朱子学を厚く信奉して、乱れた学問の道を正しました。いわゆる「寛政異学の禁」は、栗山の建議が老中首座・松平定信に取り入れられたものです。各方面からの相当な反対がありましたが、栗山は泰然として動かず、以後学風は朱子学派を中心に発展しました。

また『神武陵詩』にみえるように勤王の精神による山陵、大内裏の修復・造営についての献策の他、海防など外交の献策にまでわたってその功績が残っています。学者・教育者であつた栗山



柴野栗山
（牟礼町史より）

は、池大雅、高芙蓉などとも交わり、書画法帖に精通した人物として多くの人物の題跋を残し、文化四年（一八〇七年）十二月一日頃、病気で江戸駿河台の自宅で亡くなりました。享年七十二歳。

5 洲崎寺

〔宗派〕 高野山真言宗

〔由緒〕 洲崎寺は眺海山円通院と号し、大同年間（八〇六年）八一〇年に弘法大師により創建され、本尊である「観世音菩薩」は弘法大師の作であると伝えられています。

また、仁明天皇の承知九年（八四二年）に智証大師が密法修行の際、自ら不動明王の像を刻んで本堂に安置しました。本堂は大師の父・和氣宅成の創建です。清和天皇は、洲崎寺を勅願所と定められました。

元暦二年（一一八五年）屋島の戦にあたって、この付近は源平交戦の衝地であつたので、ついに兵火にかかりました。しかし本尊ならびに霊像だけはその災を免れ、後二条



洲崎寺

天皇の乾元元年（一三〇二年）、紀州和歌山芦辺の裏に堂宇を移し、次いで天正の兵乱に名草郡山東莊黒岩村に移し、浅野幸長の入国で再び今の和歌山市片岡町に移されました。その後、徳川頼宣入国以来大いに修繕を加えて保護寺としました。現在の松生院（旧芦辺寺）がこれに当たります。

源平合戦時、佐藤継信は義経の身代わりとなり、能登守の矢を受けて忠死しました。義経は深く悲しんで、然るべき寺院に送って葬式を執り行おうとしましたが、戦時中のため棺などを備える便がなく、また周辺は放火して寺院ありませんでした。そこで洲崎寺の住僧に命じて、戦火によって焼け落ちた本堂の扉に継信の亡骸を乗せて、瓜生ヶ丘まで運び、読経供養させたと伝えられています。

※ 真念の墓

「四国遍路の父」とか「中興の祖」と言われる真念の墓は、洲崎寺の境内南西の隅に祭られています。

真念の生年月日は不詳ですが、土佐出身で江戸初期の人です。真言宗に属し、寺も師も持たない頭陀聖ずだひじりという、遍路門付けを主生活とした僧でした。

弘法大師に帰依して四国を巡ること二十数回、分かれ道に道標を建てたり、それまでは八十八

に決まっていなかった霊場を一番から八十八番まで番号をつけて順路を決め札所としたり、案内記等を出版しました。

墓は「四国遍礼名勝図絵巻四」に「原村の小高き岡の上にあり」となっていました。が、実際は大町川東南三昧墓地にあったのを尋ねだしましたが、お参りしにくいという事で、昭和五十五年（一九八〇年）二月、洲崎寺の境内へ移転しました。



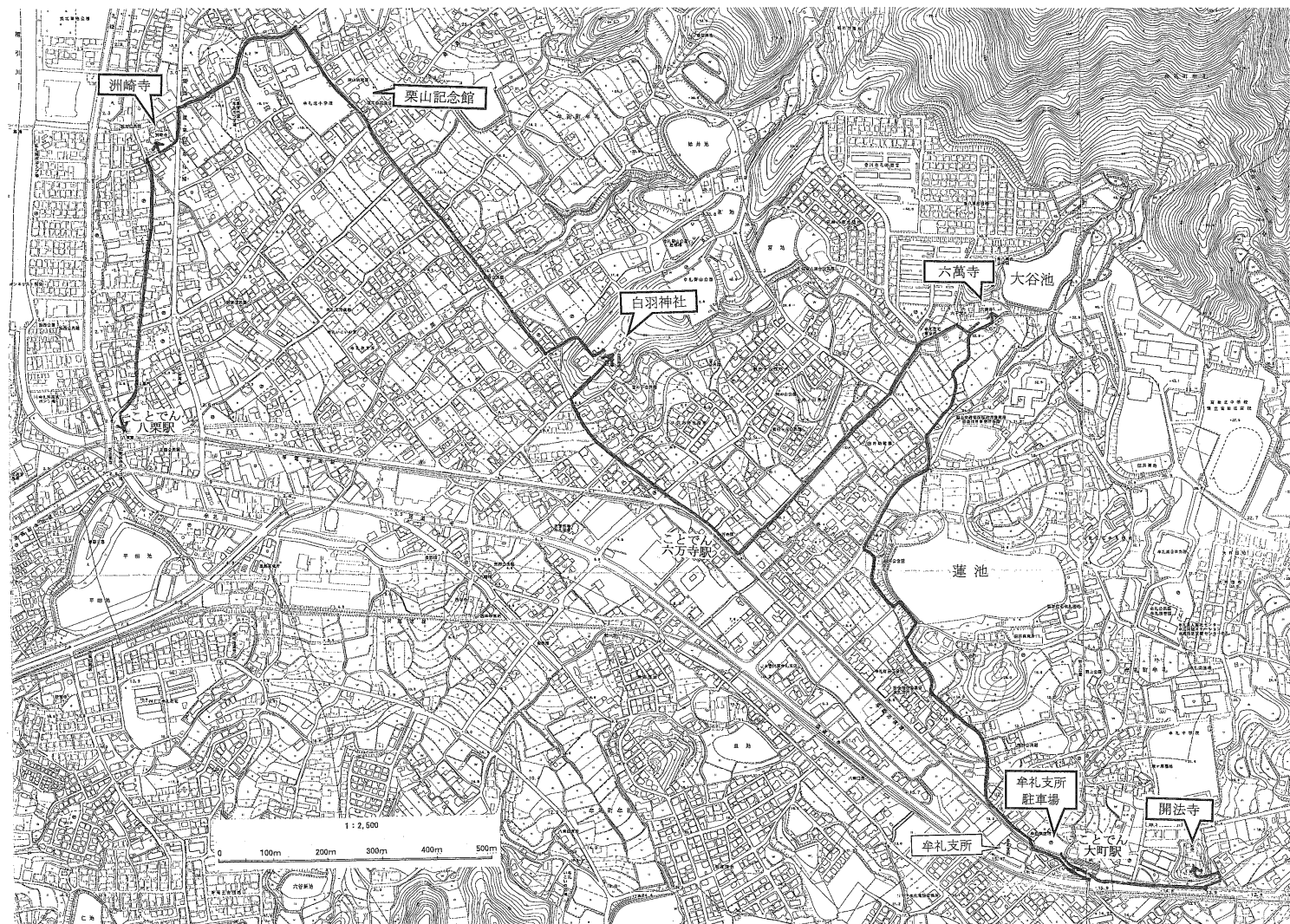
真念の墓

【参考文献】

「牟礼町史」 編集：牟礼町史編集委員会 発行：牟礼町 平成五年三月二十日発行

「牟礼町史」 発行：牟礼町 平成十七年十二月二十日発行

六萬寺ホームページ



9月30日（日） 牟礼町からの復路

ことでん八栗駅

（八栗駅）

（瓦町駅）

12:16 発 → 12:35 着

12:36 発 → 12:55 着

12:56 発 → 13:15 着



次回のふるさと探訪は・・・

テーマ 鬼ヶ島を訪ねる

とき 平成24年10月28日（日）

8：00 出発～11：00 頃

（7：30～受付開始）

集合場所 高松港 雌雄島海運フェリー乗り場

講師 大嶋 和則（市教委文化財専門員）

参加費 フェリー往復運賃（660円）

☆広報「たかまつ」10月15日号に開催案内を掲載しますので、
ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL 839
－2660「午前6時30分～開始時間まで」）でお知らせします。（電
話が通じない場合は、「実施」です。）



★次回の交通案内★

高松港

女木港

8:00 → 8:20

11:40 ← 11:20

13:40 ← 13:20



「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を
一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつ
けましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。